

釣れ釣れなるままに

2002年思い出の釣行記 PART. 4

殺生の気配

鹿島釣狂

☆開催日	平成14年9月8日
☆開催場所	小平菘川～苫前港
☆入釣場所	古丹別川
☆潮	干潮 05:30 30cm
	満潮 22:27 9cm
☆釣果	アカハラ 400mm 4
	ハゴトコ 235mm 1
	重量 1990g
☆成績	合計点数 834点
	成績 8位
	持ち点 8点
	累計点 114点 (①5050⑤⑧)

知床釣行

お盆休みに家族旅行と洒落込んだ。息子が独立し、娘も学生生活をエンジョイしている。旅行計画はもちろん女房である。それぞれの仕事や勉学、遊びの都合を調整して2泊3日の予定で知床・根室をコースに計画を立てている。8月の知床となるとやはりカラフトマ

ス釣りであろう。

息子たちが小さい頃は、旅行先での宿泊がキャンプ中心であったので、愛車のトランクにはその用具がびっしりと積まれ、釣り道具を忍ばせる事などできなかったが、今回は気楽な旅行である。ゆとりのあるトランクに釣竿等を積み込んだ。知床に向かう途中、北見の釣り具店で、息子用のルアー竿や各種マスルアー、短冊紅イカ等を購入した。

知床の山々から注ぐ小河川の河口では、釣り人が盛んに竿を振っている。オシンコシンの滝でもその河口で10名以上が岩盤の上にいる。これだけの釣り人がいるということは、



カラフトマスが回遊してきている証拠と言えるだろう。

ウトロに着き、早速、知床観光汽船の船着き場に向かう。乗合待機所ではやはり、カラフトマスが釣れているとの情報をいただく。10人乗りのクルーザーで知床の海岸線を1時間ほど観光する。釣行予定場所の幌別川の河口でも30名ほどが竿を出しているのが見える。カムイワッカの滝まで見学したが、知床の大地がそのまま海に落ち込んで、船を着ける場所は皆無である。怪奇な岩塔が海中に屹立（きつりつ）して、その割れ目から可憐な滝が幾筋も海中に注ぎ込んでいる。いくつかの滝の名前を紹介されたがその容姿に似つかわしいとは思えて

も、記憶に止まるものは無かった。カムイワッカの滝が見えてきたが、写真とは違う一段の滝である。しかし、クルーザーが遠ざかるにつれてその全貌が明らかになり、上の段の滝が姿を現した。なるほど勇壮な滝であった。



翌朝3時半に息子に叩き起こされる。

慌てて出掛けるが、途中でカメラを忘れたことに気づきコンビニに立ち寄り携帯カメラを買う。河口ではたくさんの車が駐車されており、その内の何人かが、まだ暗い海に向かって盛んに竿を振っていた。車から竿を下ろしている時に今度はエサを忘れたことに気がついた。忘れ物の癖は小さい時から直らない。息子をその場に残してホテルへ向かい、釣り場に戻った時には一気に50人ほどが河口周辺に降り立っていた。息子とは見ると、その左端でようやく二人分の場所を確保しておいてくれた。その後も次から次へと私たちの左へ釣り人がやって来る。カメラやエサの忘れ物が無ければ、もう少し河口寄りでの釣り場を確保できたのにと悔やんでも、それは後の祭りである。とにかく場所を確保できただけでもと息子に感謝する。

4時半、ルアーを飛ばす。息子はルアー、私はウキルアーである。5時ころ周りでバタバタとマスが上がり出した。5時半、息子がルアーを何度か根がかりさせ、予備が少なくなってきたので息子の竿と交換してウキルアーをセットする。息子がヒット。また根がかりかと思ったが、その後のグングンとした引き込みでマスと判断出来たとの事である。



息子は私の右側にいたのだが、私の目の前よりもさらに左方向でマスが飛翔する。竿を大きく曲げて強引に取り込んだ。1本針が上顎に食い込んでおり、2号の道糸でも全く問題は無いようだ。初の獲物に記念振影を繰り返す。

魚体を傷つけないようにとの思いから、針を外すのに手間取っている息子の様子を見て、隣の釣り人が石で頭をたたけと声をかけている。息子は仕方なくその言葉に従ったようだ。

私にもヒット。しかし、その引き込みは40cm級のニジマスと大して変わらない。スイスイと岸まで寄せたものの、そこで痛恨のぼらし。ルアーについて三本の錨針がいけなかったのではと考える。

その後はアタリのないまま時間が経過し、7時には先程までの周りの喧嘩がウソのように終了した。釣り上げたカラフトマスは、頭を叩けと指導してくださった隣人に進呈し、その場を後にした。

豊漁祈願

地域の神社の秋季祭典に出席した。秋の取り入れを前にして護国豊穰を願うものであるが、神主を筆頭にしめやかに執り行われた。地域のお偉方が出席しており、祭司の祝詞をあげるのを神妙な気持ちで拝聴していた。そこでは豊かな実りを願うものであるが、ついでに己の豊漁も祈願しておいた。

正座で足の痺(しび)れを我慢していると、「新参者のお前も何か話せ」という神社総代の急な依頼で取り留めのないことを述べざるを得なかった。挨拶はホントに苦手である。祭事後の直来では酒が振る舞われたが、重要な会議(釣り大会のこと)が岩見沢であると断り申し上げた。皆さん分別があり、いわゆる「俺の酒が飲めないのか」という強引な督促はなかったが、烏龍茶をすすりながら時間を過ごした。

皆さん、酒の酔いが回ってきて舌の動きが滑らかになってきた3時、早々に退席し一路岩見沢に向けて車を走らせた。仕掛けは芦別の住宅に様々なパーツを持ち込んでアカハラ仕掛けを5組準備しておいた。また、嫁対策にカレイ仕掛け3組、アブラコ仕掛け3組用意した。エサは時間のゆとりがないのであらかじめ芦別でサンマを購入し、切り分けて準備しておいた。帰路の道すがら、カナダ屋釣り具店に立ち寄りイカゴロ120本を購入す

る。以前、イカゴロの頭からかぶりついてきた大物アカハラがいたので、より食いつきやすいように、ゲソの頭部分を取り除く処理をして、そのイカゴロにも豊漁祈願をする。

煩惱との葛藤

懐かしい時間が経過し集合時刻になった。集まってきた仲間は皆、小平薬川河口に入るようである。私は古丹別川でアカハラをとり、三豊で嫁を取る計画だ。三豊には昨年も向かう予定だったが、大波のため断念している。前野氏も一緒ということで心強い。

つい先日の新聞で、職務上お付き合いのある大先輩が北見妓幸の川で樺太マスを密猟し、逮捕された事件が記事として掲載された。川に遡上したホッチャレなどに手を出さなくても海で簡単に遊ぶことができるのと思ってしまう。川で釣ってみたいという煩惱に負けてしまったのか。集まってくる仲間に「お前は大丈夫か」と聞かれる始末であった。釣遊会の会員として絶対あり得ないと宣言しておく。大会でサケやマスの河口規制のあるところでカジカやアカハラを狙うときなどは慎重に対応していきたい。

バスの調子悪い。集合場所でバスのラジエターから出ている管の中のサーモスタットを取り除く。エアコンに関係があるらしいのだが、機械音痴の私としては、エンジンが爆発しないのだろうかチト心配になる。我が会には機械のことに滅法詳しい御仁がおるので大丈夫だとは思うのだが……。海に向かう途中、ラジエターの温度が上がり警告のブザーが鳴る。その都度、冷やすために水を追加する。碧水から留萌の峠（峠下）越えが心配であったが、やはり峠に差しかかった時にはブザーがけたたましく鳴った。会員の皆さんは観念したのか、先を急（せ）かせる様子は見られない。しかし、それは表面上のことだろう。あくまでも紳士を標榜しようとする体面と大海原に逸（はや）る煩惱との葛藤があったことであろう。

疑心暗鬼

古丹別で前野氏とともに下車する。前野氏の体力が勝り、私より一步先に進む。河口の地形が大きく変貌している。一昨年は無かった砂州が、昨年訪れたときには丘のように出現していた。その丘も、今年は全く姿を消し、見事なまでに平らになっている。そして、川の水は一旦対岸側に蛇行してから海に注ぎ込んでいる。

その低い砂州の先端に前野氏が釣り座を構えた。私はその右側に設定し早速アカハラ仕掛けをドボン、ドボンと投げ入れる。1本は嫁さん対策にイソメとサンマをつけて遠投する。しばらくアタリはなかったが、プルプルとした竿先の動きに合わせて、ゴロ仕掛けの上針のサンマに20cmを越えるソイがかかってきた。嫁さんが出来た。そのソイに続きアカハラがポツンポツンと上がり出した。しかし、どれも40cmに満たないものばかりである。

潮鱗会の篠田氏がやって来て川筋に入った。私のものより型が大きいようである。篠田氏からお声が掛かり前野氏との間に割って入った。しかし、私にかかってくるアカハラの

型はイマイチのものばかりだった。

先程から対岸側に入った釣り人がこちらに向けて眩しいライトをチカチカと照らしている。声をかけると仲間の西川氏と岡氏だ。大声で状況を尋ねるが、あまり芳しくないよう「ではある」。「ではある」としたのは、お互いの牽制も考えられるからである。どうも大会となると「天上天下唯我独尊」の心境になり私心に巢食う疑心暗鬼が頭を擡（もた）げてくるのである。

殺生の気配

満潮に向かって潮が満ちて来た。私たちの立っている所にもじわじわと波が押し寄せて来るようになった。3人共少しずつ下がりがながら打ち続けているが、あずましくない。篠田氏が嫁を探して三豊方向に移動して行った。突然、前野氏が腰をためて大きく後退りして来る。華麗な竿捌きで上がって来たのは50cmに届きそうなアカハラである。前野氏はイカゴロが底をついたこともあり、すぐさま嫁を取りに移動して行った。私は前野氏のアカハラを見たことに加えて、イカゴロもまだ余っているので粘ってみたが、やはり状況に変わりはない。

5時に三豊に向けて移動し始める。途中、岩盤上の根が見えるところで前野氏や篠田氏が盛んに竿を振っていたが、嫁は取れていないということである。獣道が舗装に変わったところで、名人会の森田氏が車の中で仮眠を取っていた。来週に予定している大会の下見のようである。声をかけようと思ったが、あまりにも安らかな眠りに落ちているようなのでその場を静かに立ち去る。

防潮堤の出っ張りにテントが張っており、そのロープに沿って竿が立て掛けられている。ここでも足音を忍ばせ静かに脇を通ったが、中からキャンパーがはい出して来た。私の殺気が生み出す不穏な空気を察したらしい。こちらは努めて朝の清々（すがすが）しい挨拶を交わし、取り留めもない話をしたはずだが、眉を撃（ひそ）められてしまった。隠そうとしても隠し切れない殺伐としたエネルギーを感じたのかもしれない。己の未熟さを恥じ入る。

アブラコ様

防潮堤から降りて前の浜に竿を設置する。浅い岩盤上の根が沖まで続いているところである。竿3本共、1本針で遠投する。ハゴトコが来る。しかし、どれも最初に上げたソイより小さい。

島氏がやって来た。幌向川河口でやっていたが、アカハラが小さいと言う。一緒に竿を並べたが竿を引き込むようなアタリがでない。ハゴトコと遊んでいるうちに時だけが経過していく。まだまだ海が温かいのであろうか、フグまでも釣れてくる有り様である。

片付け始めた。2本日に手をかけ、昆布根を交わすために竿を煽る。ゴツゴツとした手ごたえの後グックと抜けてくる。アブラコだ。40cm程はあるように思える。早めに浮き

上がった茶褐色の塊が波頭をあげながら海面上を進んで来る。僅かだが右に左にと頭を振るようである。喜びのあまり隣の島氏に声をかける。

「アブラコだ。最後の最後に来たよ。」

ハゴトコが上がる度に、何度も同じような声をかけ、重そうな素振りを繰り返していたため信頼はイマイチである。しかし、竿先の大きな曲がりとともに、茶褐色の塊が飛沫をあげているのを見て、頑張れと声をかけてくれる。そして、手元によって来たのは長〜い尻尾がついており、最後の抵抗を見せる訳でもなくすんなり上がった。島氏に声をかけていたこともあり、赤面の至りである。昆布の根っこの部分に針が突き刺さり3本ほどを引き連れて来ていたのである。

ノアの方舟

審査の結果は

審査結果

優	勝	岡 英成	1 1 0 4 点 (アカハラ403mm+アブラコ400mm+3010g)	古丹別左
準	優	勝 秦野光徳	9 8 2 点 (アカハラ437mm+アブラコ303mm+2420g)	苫前三角
3	位	前野達志	9 6 1 点 (アカハラ466mm+ハゴトコ209mm+2860g)	古丹別右
4	位	西川紘一	9 5 0 点 (アカハラ435mm+ソイ 275mm+2400g)	古丹別左
5	位	吉井 博	9 5 0 点 (アカハラ389mm+アブラコ348mm+2130g)	小平左右

であった。例年になくアカハラの型が小さくて低い点数での戦いであった。唯一、岡氏が足で稼いだアブラコが光っていた。私はといえば834点(アカハラ400mm+ハゴトコ235mm+1990g)の8位であった。

海は人間にとって、まさに初発の世界を象徴している。ただ、昨今はその海さえもいくらかずつ汚染させられ、私にとっての母である日本海さえ危ない。しかし、それよりもっと恐ろしいことは、排気ガスや樹木の伐採によって地球の酸素がしだいに欠乏し、二酸化炭素が増したために地球の温度が上がって来たという問題である。温度が5度上がれば、地表に出ている氷山がとけ、海の水位が40mも50mも上がるだろうというのである。その結果、ニューヨークも東京も欺瞞の都市である平壤も海底に沈み、それは現代における新しい旧約である。それは未来に横たわっている新しいノアの洪水に違いない。

私が小学生のころ学校の図書室から借りて読んだ中に、たしか「海底5万マイル」というSF冒険小説があった。その挿絵に、主人公が漂流中の小さなノアの箱舟の海底に東京タワーを中心とした高層ビル群が描いてあった。神秘的な風景でそれなりの憧れにも似た感覚を覚えたが、現実的とは思えなかった。しかし、今となってはそれがまるで当たってはいないとは言い切れない恐ろしさがある。私たちの母である大海原がいつまでも健康で、豊かで芳醇な贈り物を授けてくれることを願わずにはいられない